

Title	地域研究を学ぶ：インドネシアでの特別研究プロジェクト
Sub Title	Practicing area studies : the special research project in Indonesia
Author	野中, 葉(Nonaka, Yo)
Publisher	慶應SFC学会
Publication year	2025
Jtitle	Keio SFC journal Vol.24, No.2 (2024.) ,p.8- 18
JaLC DOI	10.14991/003.00240002-0008
Abstract	筆者がインドネシアで実施する特別研究プロジェクト「東南アジア共生プロジェクトーインドネシアフィールドワーク」を、SFCで地域研究の素養を教える教育の一形態と位置付け、昨年実施した「特プロ」での参加学生たちのミーティングでの発言や成果物の分析を通じて、その成果を検証した。これによれば、本「特プロ」は学生たちに地域研究のエッセンスを教える科目として一定の効果があり、またSFCでの言語教育や研究会での研究、関連する講義科目などと連携し、継続的な学びの一つとして実施することで学習効果が大きいことが分かった。
Notes	特集 地域研究リテラシー：SFCにおける現在と展望 第1部 招待：実践報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11671240-00240002-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[招待：実践報告]

地域研究を学ぶ

インドネシアでの特別研究プロジェクト

Practicing Area Studies

The Special Research Project in Indonesia

野中 葉

慶應義塾大学総合政策学部准教授

Yo Nonaka

Associate Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Correspondence to: yon@sfc.keio.ac.jp

Abstract:

筆者がインドネシアで実施する特別研究プロジェクト「東南アジア共生プロジェクト—インドネシアフィールドワーク」を、SFCで地域研究の素養を教える教育の一形態と位置付け、昨年実施した「特プロ」での参加学生たちのミーティングでの発言や成果物の分析を通じて、その成果を検証した。これによれば、本「特プロ」は学生たちに地域研究のエッセンスを教える科目として一定の効果があり、またSFCでの言語教育や研究会での研究、関連する講義科目などと連携し、継続的な学びの一つとして実施することで学習効果が大きいことが分かった。

The special research project that the author conducts in Indonesia is positioned as a form of education at SFC to teach the essentials of area studies, and the results of the project was verified through analysis of the participating students' comments at meetings and the products of the project conducted last year. The project has a certain effect as a subject to teach students the essence of area studies, and it also has a significant learning effect when implemented as a part of continuous learning in conjunction with language education, seminar research, and related lecture courses at SFC.

Keywords:

特別研究プロジェクト、インドネシア、地域研究、SFC、フィールドワーク

the special research project, Indonesia, area studies, SFC, fieldwork

1. はじめに

1.1 問題の所在

筆者はSFCにて、特別研究プロジェクト「東南アジア共生プロジェクト—インドネシアフィールドワーク」を春・夏の長期休暇中に開講している。コロナ禍の2020年から2022年を除き、2016年からほぼ毎年実施しており、直近の2023年春休みが5回目の開講だった。本科目は、「地域研究」を教える科目と明示してはいない。けれども筆者の専門の一つはインドネシアの地域研究であり、特にムスリム社会に関心を持っている。SFCでは、インドネシアやムスリム社会に関する講義科目や研究会を担当しながら、マレー・インドネシア語(以下、マイ語)も教えている。これらの担当科目を通じて、学生たちには、インドネシアやムスリム社会についての理解を深め、異なる価値観や信仰を持つ人々との関わりを学び、より良い世界を作るための協働に向けた気づきを得てほしいと考えている。特別研究プロジェクト「東南アジア共生プロジェクト—インドネシアフィールドワーク」(以下、特プロ)は、こうした授業の一つである。長期休暇中の約10日間をインドネシアで過ごし、小グループに分かれ、それぞれ特定のテーマからインドネシア社会の現状や特色を理解しようとするものだ。これまでの5回の実施で、のべ90人ほどの学生をインドネシアに連れて行ったものの、その成果についてこれまで書く機会はほとんどなかった¹⁾。ここでは、本特プロをSFCの継続的な学びの中で地域研究の素養を学べる科目と位置づけ、その成果をまとめてみたい。

1.2 地域研究とは何か、何を指すものだったのか。

地域研究とは、既存の学問的ディシプリンには現実世界の理解に十分に対応できていない側面があるとの立場に立ち(山本, 2012, p.18)、現実世界が抱える諸課題に対応するため、特定地域に固有の経済、政治、社会の仕組みを総合的・学際的に研究するアプローチ(児玉谷ら, 2021, p.4)であり、そのために、現地での長期滞在・調査と言語の習得が不可欠(児玉谷ら, 2021, p.4; 柴, 2016, p.9など)だとされる。

しかし、地域研究に対しては、その成り立ちやアプローチに対する批判も多い。地域研究(Area Studies)は、第二次大戦中から冷戦期にかけ、アメリカの世界戦略の中での「敵国」研究、「発展途上国」研究にルーツを持つ(柴, 2016, p.2)。エドワード・サイードは『オリエンタリズム』の中で、アメリカを中心とする地域研究の専門家が、文学的テキストよりも「事実(ファクト)」をはるかに重要視し、地域とその住民を概念的に去勢し、いくつかの「態度」「傾向」、統計上の数字へと還元し、人間性をはく奪してきたことを痛切に批判している(サイード, 1993, p.208)。アメ

リカを中心とする西欧にとって、アジアは「西洋ではないもの」＝「異なっている」、「未開発地域」、「後進国」、「野蛮な文明」と認知されることで研究者の注意をひく対象だった。地域研究は、アジアを筆頭として西洋ではない地域や人々を専門的に研究する分野であり、「異なったもの」を知ろうとする行為を通じて、その反転として観察者自らの西洋人という位置性を確保することにも貢献してきた(酒井, 2017, p.56-7)。

また明治期以降、西洋を手本に近代化を進め、西洋の仲間入りを目指してきた日本のアジア研究もまた、オリエンタリズムのアジア認識の影響を免れてはいない。姜尚中は、戦前の日本の植民政策学の根底にあった「東洋的専制主義」論と「停滞社会」論が、戦後日本の社会科学の有力なパラダイムとつながっていると指摘している。日本の研究者にとっても、アジアは自らを語りえないがゆえに誰かに表象(代表)してもらわなければならない対象であり、研究者自らは、アジアを「客観的」に対象化する観察者として、自由にその構成原理を押し付けてきた(姜, 2004, p.96-8)。こうしたオリエンタリズム的思考のままにアジアと対峙するのであれば、「多様性に富むアジアの歴史や社会」(姜, 2004, p.98)の理解には繋がらないことは言うまでもない。

インドネシア語を学び、インドネシア社会に関する本を読んだり、講義を受けたり、さらにインドネシアを訪問したからと言って、こうしたオリエンタリズム的思考を払拭できるとは限らない。教科書で「異質性を強調する」記述を学びイスラームについての知識を増した中高生たちが、かえってその否定的イメージを強く持つことが指摘されている(荒井・小林, 2020, p.22)。文化相対主義とは本来、自文化中心主義を批判することで真の普遍的認識に至ろうとするもの(浜本, 1996, p.69-96)であるにもかかわらず、それぞれの文化が独自の価値を持つという考え方が常識化した結果、逆説的に自文化の優位性を肯定する人が増えてきている(佐藤, 2015, p.30)という指摘もある。インターネットが普及した現在、当該地域の言語習得や長期滞在すらもはや不要だと考える人たちもいる(武内, 2013, p.54 など)。

しかし、地域研究は「学問的に南の世界に対する理解の拡大・深化に貢献し、ヨーロッパ中心主義的見方を打破することを目指す」(児玉谷ら, 2021, p.6)のものであり、住み慣れた場所と離れた地域との出会い、現実の豊かさを知る(児玉谷ら, 2021, p.32)契機だとする捉え方もある。また、総合的学際的なアプローチを採る地域研究は、学問分野の細分化が進行する中で理解の総合性が失われ全体が見失われている(坪内, 1999, p.2)という危機感や、既存の学問では現実世界の理解が十分に対応できていない(山本, 2012, p.18)とする懸念を背景に発展したが、これはSFCの理念

にも通じるものである。筆者が所属する総合政策学部の理念を伝えるウェブサイトでは、現実社会の問題は特定の学問領域の内側に現われるわけではないこと、問題解決のための有効な政策的判断を導くには、学際的領域横断的な視点が求められること、SFCはそうした視点を持ち、社会にコミットして実践しながら、知を形成していく場であることが述べられている²⁾。

地域研究は、西洋中心主義や自文化中心主義など自分たちが含まれるグローバルな力関係を認識した上で、地域からそうした力関係を問い直す取り組みであり、異なる人々とより良い世界を築いていくための足がかりとして、特定の地域ひいては世界を知るための試みとして、実践されるべきものであり、SFCはこうした地域研究を教育する場として相応しいと筆者は考えている。

1.3 問題設定と依拠するデータ

以上のような地域研究をめぐる議論を念頭に、本稿では、以下の構成で特プロの成果を検証したい。

まずは次章で2023年春休みに筆者が実施した特プロの実施内容を概観する。

次に3章では、学生たちに課した課題を学生たちがどのようにまとめたのか、課題に対する学生たちの成果物の内容を紹介する。

4章では、特プロ期間中に毎晩実施した全参加者を集めてのミーティングで学生たちが話した内容をもとに、本特プロで学生たちが学んだ内容とその成果を考察する。その際には、以下の4つの軸を用いることとする。

1. フィールドワークやインタビューといった地域研究の素養を学生たちはいかに学ぶことができたのか。
2. インドネシア語の習得は、現地の人々とのコミュニケーションや人々との関係構築にいかに関与したか。
3. オリエンタリズムの見方を乗り越え、いかに現地社会や人々への理解を深められたか。
4. SFCでの継続した学びの中に、特プロをいかに位置づけることができるか。

2. 特プロの実施

2.1 特プロの概要

SFCの特プロは、春と夏の長期休暇中に各教員が期間や場所、活動内容を自由に設定できる科目である。授業時間数に応じて2単位または4単位の科目であり、学生は各休暇中に上限4単位まで履修することができる。教員にとっては責任コマ数に含まれず、学生にとっては必修の科目ではないが、SFCでは休暇中に数多くの特色ある特プロが開講され、学生たちが学んでいる。筆者は、2016年

からインドネシアでの特プロを開講してきた。コロナ禍の2020年～2022年は不開講となってしまったが、2023年春休みに再度の実施に至った。訪問先やテーマはその都度変わるが、10日前後の期間中、ジャカルタと地方都市の2か所を訪問すること、少人数のグループで活動することなど基本的な設定は維持している。

以下は、シラバスから抜粋した特プロの要旨とスケジュールである。

要旨

本プロジェクトは、現代インドネシア社会でのフィールドワークを実施し、現地の人々との交流や対話を通じて、異なる文化や社会に生きる人々たちの共生に向けた理解を深めることを目標に実施されるものです。

活動の柱は大きく2つです。一つは、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアで、宗教(特にイスラーム)に関わる様々な社会問題に目を向けること。もう一つは、政治・経済・文化の中心地である首都のジャカルタとスラウェシ島マカッサルの双方を訪れ、インドネシアの広がりや多様性を学ぶこと。特に、若者の教育の場やイスラーム関連組織を中心に訪問、交流活動を実施します。プロジェクト参加者と同年代の学生たちとの交流は、今後の継続した学術交流活動やSFCとのネットワーク構築に向けた布石になればとも考えています。また、住民が暮らす地域を訪れ、宿泊しながらの調査や聞き取りを行うことで、文献調査では知ることのできない人々の実際の生活の様子を体験し、交流することを目的とします。

スケジュール

- 1日目：ジャカルタにて現地集合
- 2日目：南ジャカルタ・レンテンアグン地区の都市地域裏(カンブン)でのフィールドワーク
- 3日目：ムスリムファッション企業エルザッタ訪問、国際交流基金ジャカルタオフィス訪問
- 4日目：ジャカルタのイスラーム寄宿学校(プサントレン・ダルンナジャ)を訪問(1日目)
- 5日目：プサントレン・ダルンナジャ(2日目)
- 6日目：マカッサルに移動。インドネシア銀行南スラウェシ支店を訪問
- 7日目：ラエラエ島(マカッサルからボートで10分ほど)でのフィールドワーク(1日目)
- 8日目：ラエラエ島でのフィールドワーク(2日目)
- 9日目：各グループ発表準備
- 10日目：国立ハサヌディン大学にて最終発表会
- 11日目：マカッサルにて解散。各自帰国。

特プロ実施に先駆けて、2月上旬にキャンパスにて事前学習会を実施し、履修者の顔合わせやスケジュールの確認の他、訪問先に関する文献の輪読や各班での打ち合わせなどを行った。また、筆者からは特プロの趣旨と大事にしてほしい心がまえを学生たちに丁寧に説明した。ここには、受動的な態度ではなく主体的に動き活動してほしいこと、博物館や遺跡を訪れるのではなく実際に人々が生活する場に足を踏み入れる意味を考えてほしいこと、その際には訪問者としての自覚が必要であり、一歩間違えれば現地の人にとって「迷惑者」になる可能性も大いにあること(宮本・安溪, 2008)、などが含まれている。さらに、課題に取り組む際の前提として日本との比較の視点を持ってほしいこと、テーマに対する現地の人の考えを単に聞くだけでなく、自分たちの見方とどう違うのか、どの程度似通っているのかを考えてほしいことも伝えた。こうした作業を通じて、学生たち自身が無意識に持っている、多くの場合日本という特殊な場で植え付けられた特定の価値観に対して、自覚的になることを期待したのである。

2.2 特プロの課題

本特プロでは、班(1班4～5人)ごとに決められたテーマから、現地社会を観察し、また現地の人たちに話を聞くことを学生たちに課している。今回は①テクノロジー、②教育、③相互扶助、④労働、という4つのテーマを設定し、各学生の希望をもとに班分けを行った。学生たちは、11日間の活動の成果を5～6分程度の映像とポスターにまとめ、最終日に提出しなければならない。制作した映像は最終日にマカッサルの国立ハサヌディン大学で上映会を開催し、同大学日本学科の先生方と学生たちに視聴してもらった。また帰国後の2023年春学期に筆者の研究会で活動報告を行うこと、筆者の研究会を履修しない学生は、学期初めに3000字程度の活動報告レポートを提出することも課題とした。

2.3 参加者のプロフィール

以下は、今回の特プロに参加した18人のプロフィールである³⁾。名前は伏せてある。学部「総」は総合政策学部、「環」は環境情報学部を示す。学年と性別は、1年生から4年生まで、また男女で、今回はほとんど偏りがなかった。

真ん中の「特プロ参加前の履修・インドネシア滞在歴」の左3列は、本特プロの参加以前に、どの程度、インドネシアの文化や言語について学んできているのかを記したものである。その右列「インドネシア歴」に書かれた「短期語学」とは、SFCのマイ語コースが提供する語学研修のことである。語学研修は、特プロ同様、春と夏の休暇中に

開講される科目であり、マイ語コースでは、中部ジャワのサラティガにあるサティヤ・ワチャナ大学にて2週間の語学研修を実施している。「長期留学」とは、義塾の交換留学制度でインドネシア大学へ、またインドネシア政府が提供するダルマシワ奨学金を得てインドネシア各地の大学へ、1年間留学した、または留学している学生たちである。さらに「ドキュメンタリー映画制作」は、2019年春、学生が任意団体を作り、インドネシアでの映像制作活動を行ったことがあり、それに参加した学生たちのことである。

今回の特プロでは、筆者の研究会、講義科目、マイ語のいずれか一つを履修済であることを参加条件としたが、それ以上に複数の科目を履修した学生が多いことがわかった。また、表には示せなかったが、多くの学生が研究会やマイ語を複数学期にわたり継続して履修していた。さらに語学研修や留学などで、インドネシアに滞在したことのある学生が過半数を占めた。つまり、参加者の多くが特プロ参加以前に筆者の担当科目やその他の活動を通じてインドネシアの文化や言語を多少なりとも学んだ経験を持つ学生であり、筆者は参加者全員とすでに顔なじみだった。学生同士は初対面の人たちもいたが、授業やゼミ、様々な活動を通じて、すでに友人関係や先輩後輩の関係ができている者たちも多かった。

3. 各班の研究成果

本特プロで教員から各班に提示するのはテーマのみである。学生たちは班ごとにそのテーマからさらに具体的なテーマを設定し、各訪問先で人に話を聞いたり、活動を観察したりする。先に述べた通り、各テーマについて日本との比較の視点を持つということ、テーマについて自分たちの見方をまとめておこうということ、事前に筆者から学生たちに伝えていた。しかし実際に現地を訪れると、想定外の発見が多くあり、その都度、学生たちはテーマを軌道修正したり、質問内容を考え直したりしなければならなかった。毎日、予定はかなり詰まっており、その中でテーマについて考え議論し、調査を行い、ポスターと映像にまとめて最終日に現地の大学で発表するのは大変な作業だった。誌面が限られているため、完成したポスターや映像を元に学生たちの学びを検証することは今後の課題とし、ここでは、各班の研究成果の要点をкаいつまんで紹介するにとどめる。

【テクノロジー班】

テクノロジー班は、2019年8月にインドネシア政府とインドネシア銀行が主導して運用が始まったQRコード決済システムQRIS (Quick Response Code Indonesian Standard) の

表 特プロ参加者プロフィール

	参加者基本情報			特プロ参加前の履修・インドネシア滞在歴				特プロ参加後の進路、履修		
	学部	学年	性別	野中研	マイ語	野中講義科目	インドネシア歴	進路・留学	23春野中研	23春マイ語
1	総	4	女	○	○	○	ドキュメンタリー映画制作	他大学院進	-	-
2	環	4	女	○	○	○	短期語学、長期留学	SFC院進	○	-
3	総	4	男	○		○		就職	-	-
4	総	4	男	○		○		就職	-	-
5	総	4	女	○	○	○	ドキュメンタリー映画制作	他大学院進	-	-
6	総	3	男	○					○	
7	環	3	男	○	○	○	短期語学		○	
8	総	3	男	○	○	○	短期語学	夏～長期留学	○	○
9	総	3	女		○	○	長期留学中	留学継続	-	-
10	環	2	男	○	○	○	短期語学	夏～長期留学	○	○
11	環	2	女	○	○	○		他国に留学	-	-
12	環	2	女		○		短期語学			○
13	総	1	男		○	○	短期語学	夏～長期留学	○	○
14	総	1	男		○	○	短期語学	夏～長期留学	○	○
15	環	1	男	○	○		短期語学	夏～長期留学	○	○
16	総	1	女		○		短期語学	翌夏～長期留学	○	○
17	総	1	女		○		短期語学			○
18	総	1	男		○		短期語学	夏～長期留学	聴講	○

普及をテーマに選んだ。日本では、複数の事業者による異なる QR コード決済システムが乱立し、競争が激化しているが、インドネシアでは、政府主導で統一規格 QRIS が導入され、取引額が急増している。このグループでは、QRIS の利用実態を利用者側への調査を通じて明らかにすることを目指した。

ジャカルタのモールで行った調査によれば、訪問客(主に中間層以上)の多くが頻繁に QRIS を利用しており、もはや現金よりも QRIS での支払いが主流だということが明らかになった。一方で、銀行口座を持たない貧困層が多いジャカルタの路地裏では、QRIS の利用者は大変少なく、いまだに現金決済が主流だった。同様にマカッサルのラエラエ島でも現金支払いが圧倒的であり、QRIS を使うのは本土からの日帰り観光客ばかりだった。ただし、島で唯一の QR コードは、これを管理する自治会長を通じて、住民と島外に暮らす家族との送金的手段として使われており、ラエラエ島では、QRIS があたかも ATM のような役割を担っていることも分かった。

また、これまでは各地のモスクに現金を持参して手渡しという形で行われてきたイスラームの喜捨(ザカート)について、特に都市部では、QR コードを利用したオンラインでの支払いが可能になり、中間層や富裕層の間で広まりつつあることも分かった。

【教育班】

教育班は、「インドネシアの教育熱を探る」をテーマに掲げた。事前学習で読んだ文献から、インドネシアでは現在、生活水準の向上に伴い急激な学歴化社会が到来していること、富裕層や中間層だけでなく貧困層にも急速に教育熱が高まっていることを学んだ(倉沢, 2013)。それをもとに学生たちは、就学率が上昇しているインドネシアでは「受験に対する」教育熱も高まっているはずだという予測を立て、現地調査に臨んだ。

けれども実際に現地で話を聞いてみると、インドネシア全体で受験戦争と呼べるほどの状況は生じてはいなかったし、学生たちが想定していた受験のための教育熱とはほど遠い現実があった。ジャカルタの路地裏やラエラエ島では、実践的なスキル習得のための職業高校が中等教育の主要な選択肢だった。また共同生活を通じたより良い人格形成ができるという理由でプサントレンへの進学は、居住地域や親の所得には関係なく人気があった。一方で、将来のための投資として教育を捉えている点は、日本にも通じることだと結論づけられた。

【相互扶助班】

相互扶助班は、「相互扶助とゴトンロヨン」というテーマを設定し、各地でのインタビューを通じて、ゴトンロヨンと呼ばれるインドネシア固有の相互扶助の実情を明らかにすることを目指した。ゴトンロヨンは、住民の自主的な行動を基盤とする幅広い活動であり、地域の清掃、道路の整備、集まって食事したり、結婚式の支度を手伝うことなども含まれる。

学生たちは、当初、インドネシアにおけるゴトンロヨンを、日本の町内会での相互扶助活動のように、「制度化された」ものだとイメージしていた。しかし現地では、「あなたにとってのゴトンロヨンとはどういう意味がありますか?」という質問に対して的確な答えが返ってこなかった。インドネシアでは住民同士の支え合いは、人々の日常に自然に溶け込んでおり、だからこそ、その意味を問われても答えられない人が多いということに学生たちは初めて気が付いた。また、日本では都市化やライフスタイルの個人化などで地域のつながりが希薄になりそれが問題視されている一方で、インドネシアではゴトンロヨンを通じた地域のつながりが現存している。学生たちは、これを素晴らしいことだと考えていた。しかし人々の話を聞くにつれ、彼らが寄付をしたり、地域の人を支える活動に参加するのは、一義的には、自分が困った時に助けてもらうためということが分かった。つまりゴトンロヨンが成立する背景にあるのは、純粹に人助けをするという美談ではなく、必要な時に自分も支援を受けるためという実利的な理由だった。ゴトンロヨンは行政サービスが必ずしも整っていないインドネシアで人々の暮らしを支えるセーフティーネットとして機能しているということを学生たちは理解したのである。

【労働班】

労働班は、「職業選択—私と仕事」というテーマに掲げた。班のメンバー 4 人のうち 3 人が 4 年生だったこともあり、日本の就職活動を念頭に、インドネシアの人たちがどのように仕事を選択するのかを調べたいと考えた。この班でも、学生たちは、現地で様々な階層や年齢の人たちに会って、多様な考え方に触れ、自分たちの想定が何度も覆されたという。

例えば女性の社会進出に対して。日本の現状に照らして、女性がキャリアを積んでいくためには、出産後も元の会社に戻るしかないと学生たちは捉えていた。また、貧困層の人たちは、生活を維持していくため多少きつい仕事でも収入を重視して働くのだらうと予測していた。さらに、職の選択が限られ人の移動が少ない地方の伝統社会では、親の職業を当然に子供が受け継ぐものだと考えていた。しかし、

ジャカルタの路地裏では、家庭や子育てを最優先にしながら自宅前でクレープを作り売って収入を得る人たちに会い、経済的な成功よりも、それなりの収入獲得と家庭の両立を選択する人々の存在を知った。また、ムスリムファッション企業エルザッタの女性創業者の話を聞き、インドネシアは女性の社会進出や起業に対するハードルが日本よりもずっと低いこと、家庭を持ちながらも自らのキャリアを積み、社会に対するインパクトを与えることもできる土壤だということを学んだ。漁業従事者が島民の大半を占めるラエラエ島では、学生たちの予想に反し、漁師になりたいという子供はほとんどいなかった。また、親たちも収入の不安定な漁業ではなく、子供たちにはより安定した職に就き、より良い暮らしをしてほしいと考えていた。

4. 特プロの成果 一学生たちの発言の分析から

ここでは期間中のミーティングを文字起こしたデータを用い、先に掲げた4つの軸で特プロの成果を検証する。このミーティングは、一日の終わりに筆者と参加者全員が集まり、車座になって座り、学生たちが順番に自由に発言する形式である。発言は、班のテーマに関わる内容でも各自の個人的な発見でもいい、自分が感じたモヤモヤやイライラも含め言語化してほしい、なぜそのように感じたのかを自分自身に問いかけてほしいと、学生たちには事前に伝えてあった。毎晩、各々がその日の活動を振り返り、気づきや発見、感じた違和感などを発言して共有した。ミーティングは毎日1時間～1時間半、平均すると学生1人当たり3～4分話していたことになる。教室の授業ではめったに発言しない学生も含め、全員が前向きにこのミーティングに参加しており、今日はどのような発言をしようかとミーティング前に真剣に思考する様子も見られた⁴⁾。筆者にとっても、毎日多くの人に会い、様々な新しい事柄に触れて、新鮮な気持ちのままに発せられる学生たちの発言は、とても刺激的なものだった。

4.1 フィールドワークやインタビューといった地域研究の素養を学生たちはいかに学ぶことができたのか。

10日前後の滞在で学部生たちが行う特プロでのフィールドワークやインタビューは、研究のレベルで言えば、経験を積み、言語を習得し、現地に長期滞在する地域研究者が行うものとはかけ離れた稚拙なものである。しかし特プロの活動を通じて、学生たちはそれぞれに多くの新鮮な気づきや学びを得た。その中には、地域研究に不可欠なフィールドワークやインタビューに関連した学びも多く含まれている。

まず挙げたいのは、想定と異なる現実や問題設定の難し

さに対する気づきである。自分たちの常識や経験に照らし、事前に頭で考えてきたことと、現場で見たり聞いたりすることが異なっていたという感覚を、多くの学生が持ったようだ。また、自分たちが問題だと思っていたことが、現地では問題として捉えられていなかった、という感想を持った学生たちもいた。

以下は、相互扶助班のメンバーが、ジャカルタの路地裏で住民に話を聞いた時の印象を話した内容である。

なんでゴトンロヨンするのっていうのを聞いた時に、自分が困った時に助けてもらうためには、普段から自分も人を助けないといけないみたいな風に言っていて、なんて言うんだろう、見返りを求めずに助けるわけじゃなくて、そういう正直な感じなのか、面白いなと思いました。(中略)たとえば事故に遭って、体が動かなくなって働けなくなっても、一人で抱える必要はないっていう、そのマインドセットを普段から持っておける、もし何かあっても一人じゃないっていう風に普段から思えること自体が、精神的負担を減らすことにも繋がるし、それがゴトンロヨンの大切なパートだって。

相互扶助班の別の学生は、ゴトンロヨンについて聞きながら、ジャカルタ路地裏の若い女性たちと、出産やキャリアについて話をした。その際に、「なぜ子供を産みたいのか」という質問や、「なぜ今でもゴトンロヨンはこの地域で成立しているのか」というような質問に対して的を射た回答を得られず、逆になぜそんな質問をするのかという反応が返ってきたという。当該地域では、女性が子供を産むことも、ゴトンロヨンで支え合うことも当たり前の事柄であり、日本の常識に照らして、自分たちが問題と感じていることが、ここでは問題として捉えられていないのかもしれない、と考えたようである。

日本だったら、なんか産むにしても産まないにしても、理由を考えてやるかなって思うんですけど、産むのが当たり前の社会だったら、なんで産むんですかとか、質問するのはちょっと違うのかなって感じしました。だから、なんでゴトンロヨン今でも成立していると思いますかって聞いても答えが返ってこなかったのかなと。

次に、教育班のメンバーが、同じくジャカルタの路地裏にて行った調査の後に話した内容である。自分の視野が狭かったことを自覚したと言う。

日本にいと高校に行くのが当たり前という価値観が自然にあって、カンブンの人たちがどういう高校に行って、どういう大学を受けるのかとか、受験に対してどういう意識を持ってるのかを聞こうとしてたんですけど、どこの学校に行ってるのって聞いたら、SMK(職業高校)に行っています、これは高校ではなく特定の職業に就くための専門的な学校ですって言われて、その時点で、自分の視野の狭さを感じて、なるほどと思いました。

労働班のメンバーは、マカッサルのラエラエ島で住民たちが、自分たちの想定とは大きく異なる職業観を持っていることに驚いたことを話した。漁師の子供は漁師を目指すだろうという見方が短絡的だったこともメンバー間で共有したようである。

私たちの予想では、漁師が多いので、その漁師の子はもちろん漁師みたいな。全く夢とかなく当たり前前にそれをやるものみたいなイメージが、多分皆にあったと思いますし、私にもあったんですけど、意外と全然そうじゃなくて別のあり方が見れました。

次に、インタビューの方法論について。多くの学生たちにとって、現地の人たちの生活空間に足を踏み入れ、人々にインタビューすることで情報を得るのは初めての経験だった。言葉もほとんど通じない初対面の人に信頼してもらい自らが聞きたい内容を答えてもらうということに、多くの学生はとても苦労し、感じることや学ぶことも多かったようである。フィールドワークとは、相手の親切心に依存しながら、話してもらったこと、教えてもらったことを論文などの形で発表し、自分の利益や成果にする行為であり、ここには知識や情報を提供する側とそれを収奪する側という力関係が常に存在する(岸ら、2016, p.62)。こうしたことに自覚的にならなければ、無意識のうちに研究者がその特権的な立場に甘んじ、自分たちでは語れない「未開の」「無文字の」「歴史のない」他者になりかわって語ってやる(クリフォード、1996, p.17)といったオリエンタリズム的思考に陥る可能性がある。特プロでは、現地の人々に話を聞きテーマに関する情報を得ると共に、現地の人々との関わりを通じてお互いの理解を深め、今後の交流につなげるという目標もあった。だからこそ、インタビューに対する違和感や、自分なりの工夫について、ミーティングで口にする学生たちが多かった。

旦那さん仕事何してるのって聞いた時に、夫は仕事をしてないって言ったんです。その時に、これはどういうことなんだろうと思ったんですけど、それを深堀りしていいのかなって。もしかしたら、事故にあったのかもしれないし、今ちょっと病気のかもしれないし、相手も人なんで、研究だからって本当にそれを聞いていいのかってすごい悩みました。結局聞かなかったんですけど、もし聞いたら新たな発見や学びが得られたのかなとか、色々と考えました。

フィールドワークを初めてやったので、どういうものかなって思ってたんですけど、やっぱり人を相手にする情報収集だから、独特の肉感というか皮膚の温かみっていうのを感じていて。どう言ったらいいかわかんないんだけど、要するに、辞書やインターネットに情報を求めて、すぐにその情報が出てくるみたいことじゃなくて、喋ってる相手がどういう人なのかとか、どういう経歴があるのかとか、どういう風に思ってるのかとか、色んなことを大事にしながら、研究を進めていけたらいいなって思いました。

最初は事前に用意してきた質問を相手に投げかけるだけだった学生たちも、インタビューを重ねるうちに、それ以上のことも聞く必要がある、そうすれば、最初の質問に対する答えの意味や、自分たちに対してそう答えてくれた理由もより分かるようになる、と感じるようになっていった。人々の発言だけでなく、発言にある背景や文脈も読み取って理解しようとする努力、つまり「厚い記述」(ギアーツ、1987, p.8)を目指す努力も見られた。

例えば私の班は、就活についてメインに聞いているけど、それをどういう風に聞いたらいいか分からないからこそ、周りの情報を聞いていて、でもその周辺情報が分かることで、もしかしたら、さっき聞いたその就活の情報の裏にある本当の理由みたいなものが、細かい他の情報から繋げられることがあると思いました。

4.2 インドネシア語を学んだことは、現地の人々とのコミュニケーションや社会の理解にいかに関与したか。

特プロでは期間中、ジャカルタではインドネシア大学の、マカッサルではハサヌディン大学の日本語を学ぶ現地学生各4人にサポート役をお願いし、各班と行動を共にしてもらった。各訪問先でのインタビューは、基本的に彼らが通訳を務める形で実施されたが、それでも、インドネシア語

が話せる学生たちは、活動の中で圧倒的に有利だった。特に、語学研修や長期留学を経験した学生たちが、各班の活動で中心的役割を担い、他のメンバーたちを引っ張っていく姿も見られた。一方で、研究として行うインタビューで深い質問ができるほどの語学力を身につけることは簡単ではなく、そうした現実を自覚した学生も多かった。以下は1年間マイ語を学んだ1年生で、2週間の語学研修を終えて特プロに参加した学生の言葉である。

インドネシア語は多少聞き取れるし、知ってる単語がポツポツ出てきてなんとなく言ってることはわかるんですけど、それに対してより深掘りしていくような質問を自分で発話することが難しかったので、地元の人と交流とか今後していきたいので、もっと勉強頑張っていきたいって感じました。

学生たちはインドネシア語ができようができまいが、各班で現地の人たちに話を聞かなければならない。人々に自分たちのことを説明し、インタビューをお願いし、家の中や玄関先に入れてもらって話を聞くことになる。場合によっては、活動についてより詳しい説明を求められたり、嫌な顔や困った顔をされたり、相手にしてもらえなかったりすることもある。言葉も通じず、人々の生活の雰囲気もわからず最初は戸惑っていた学生たちも、プロジェクトを進めるに従い、相手に何とか自分たちのことをわかってもらおうと、また相手との距離を縮めようとする様子が見られた。インドネシア語が少し話せる学生は、会話の内容や話し方を工夫することによって、またインドネシア語が話せない学生は、手持ちの色々なモノを使って、現地の人たちに近づいていった。こうした学生たちの自発的な働きかけの例として、以下は、マカッサルのラエラエ島で活動した後の学生たちの発言である。

私はインドネシア語ができないのでコミュニケーションが難しく、ここに来て1週間ぐらいちょっときついなって思ってたんですけど、今日たまたまカバンに入れた物を使ったらコミュニケーションが楽になった感じがありました。子供たちが勝手にノートを取り出して、一緒に海を見ながら絵を描いたり。扇子がいつも行方不明になるぐらい、いろんな子が持ってきて、どこどこか言いながらそれで会話が成り立ったり、扇子で踊りを教えてくれたり。物を介したら一気に距離が縮まって、こういうコミュニケーションもあるんだなと気付きました。

予定していた質問を終えてちょっと時間が余ってしまって、子供と一緒に折り紙を折り始めたら、わあみたいになって何人か集まってくれて、お母さんたちも楽しそうに見てくれて、喉渇いたでしょと言ってオレンジジュースを持ってきてくれたり。相手を質問攻めにしちゃうよりも、子供と折り紙したり、お母さんたちともおしゃべりして接した時間って大事だったなと思いました。言語が拙いから、子供ともずっと喋り続けられはしないんですけど、折り紙とか物を介したコミュニケーションはいいなと、私もすごく感じました。

会話の最初はちょっと雰囲気が重くて、僕はどうやったら雰囲気をよくできるのかって考えて、素直にこの島に来て良かったと思ったことを話したりしました。例えば、こっちに来てからたくさん違う味のイカを食べたんですけど、インドネシアで初めてイカは食べたし、それはすごい美味しくて、僕は日本で食べるイカよりも、こっちの方がすごい魅力的な味がしたよと伝えてみたり。(中略)お互いの距離感みたいなのをちょっと緩めるといえるのか、相手への尊敬を伝え合うことっていうのかな。うまく言葉にできなかったかわかんないですけど、そういう打ち解け方をできて、思いもよらぬ展開に話が進んでいくっていうところがよかったなと思いました。

4.3 オリエンタリズムの見方を乗り越え、いかに現地社会や人々への理解を深められたか。

先に述べた通り、今回の特プロ参加者は皆、マイ語や筆者の担当科目、研究会を履修したことのある学生たちである。彼らの多くは、インドネシアやイスラームについての研究を志すと共に、インドネシアの人々との交流や、未来に向けた彼らとの共生を目標にしていたし、また、SFCでの学びを通じて、自分たちが持つインドネシアやイスラームに対する偏見やオリエンタリズムの見方に自覚的で、これを払拭し、さらなる学びにつなげたいと考えていた。特プロが進むにつれて、学生たちはいくつもの訪問先で多様な人々に出会い話をし、これまで「インドネシア」や「イスラーム教徒」として括って理解しようとしていたことを内省するようになっていった。地域や住民を概念的に去勢し、いくつかの「態度」、「傾向」、統計上の数字へと還元して(サイード, 1993, p.208)理解しようとするのではなく、その多様性に目を向けて、自分が出会った一人一人と対峙して関係性を築いていくという姿や、自分が生きてきた日本社会のあり方に対しても考えをめぐらそうとする学生たちの発言も聞かれた。

高級車乗り回して夜遅くまでパーティーしてるジャカルタの若者もいれば、今日カンブンで見たように、22歳でもう2人の子供がいて、その子たちのために色々頑張ってる人もいて、同じジャカルタに住んでる若者っていう枠組みでも全然違いますし、我々、インドネシア人っていう枠組みで話しますが、それを一緒にくたにはいけないなってすごく感じました。(中略)インタビューしていく中で自分のことを逆に省みるというか。(中略)ジャカルタの格差がすごいとかは実際あるんですけど、マクロなスケールで見れば、日本の自分の身の周りでも起きてる話だし、日本の中でもカンブンの生活をしてる人もいるだろうなと考えました。

ムスリムをはじめとしたインドネシアの人たちについて、実際話を聞いていくうちに、近づくよりは、解像度が上がるほど遠ざかるような感じを覚えていました。その人たちの生活とか考え方とかを細かく見ていくうちに、確かに同じ人間なんだけど、異なる土地で生まれた異なる価値観を持つ人たちっていうのが浮き彫りになってくる感じで。この人たち、こういう風に生活してるんだ、マジすごいなってたしかに尊敬できるんですけど心からの共感にはならなくて、私おかしいのかな、薄情なのかなとか、モヤモヤすることがありました。でも今ここに(特プロ参加者が)18人いて、ほぼ同じ日本という価値観と環境の中で生まれ育った人たちですけど、その人たちの中でも私と合わない人とめっちゃ合う人がいるんです。だからこそ個人個人に真摯に向き合いたいという気持ちが強くなってきた感じ。リサーチするにしても、個人の人間関係を築くにしても、要素や属性に縛られない人間同士の繋がりをみたいのを、より丁寧に紐解いていける姿勢があったらいいなって思いました。

筆者自身も事前学習で、また期間中の毎日のミーティングで、インドネシア人の文化や価値観、人々の行動や考え方に違和感を覚えたとしたら、なぜ自分はそう考えるのかを批判的に捉えてみよう、自分自身が持つ特定の価値観や思い込み、こだわりにも目を向けてみようということあるごとに学生たちに伝えてきた。こうした自己省察を繰り返すことで自己を変容させ、深い他者理解を得る(箕曲ら, 2021, p.5)ための一歩になると考えてきたからである。最終日には、学生たちから以下のような発言も聞かれた。

特プロでやってきたことって、インドネシアを通して、これまでの経験から自分が知らず知らずのうちに作り上げてしまっている常識や固定観念を壊して広げるっていう営みだったと感じていて。思い込んでたものを思い込んでたってことに気づいて、新しい気づきを得られる。次にまた違うものに出会った時に、前よりも少し柔軟に対応できるようになって、同時に自分が人生の中でこだわりたいことがわかってくる、というような。

以前私は、国の違いなんて超えていける、違いなんて関係なくみんな分かり合える世界があると考えていました。でも来てみると、自分の価値観や自分の生きてきた社会、関わってきた人々と共に作られてきた枠組みとか考えとかがあって、それでそのままこの社会を見てしまうような。この人々の視点に立って考える努力をしよう、そうして物事を考えようと思うんですけど、それを否定するような、自分の尺度が邪魔をしていくという感覚があって、それにすごく戸惑いながら、最後思ったのはそれでいいんじゃないかなって。自分の価値観や考えがあること自体は、人それぞれ育った環境や生きてきたバックグラウンドが違うので当たり前のことで、でも違うものと出会うことによってだんだん角が取れていくというか、違いがあるから自分の輪郭が明らかになっていくような。違いなんて関係ないっていうよりは、違いがあるからこそ良いっていうことに、気づかされました。

4.4 SFCでの継続した学びの中に、特プロをいかに位置づけることができるか。

プロジェクトがすべて終了した日のミーティングでは、各学生が11日間を振り返り、今後の学びに繋がる決意も聞くことができた。

1年生でマイ語を履修し、言語の学びをきっかけにインドネシアに関心を持ち、本特プロへの参加を決めた学生にとって、今回の経験は、今後の学びに繋がる大きなステップになったことは間違いない。

インドネシアの文献を読んだのも、今回の特プロの事前学習が初めてで、あー、インドネシアってこんな感じなんだと思って、実際に来てみたら、本当にそうだった部分もあったり、自分が受けていた印象とは違うことが現地では起こっていたり。1年生でまだやりたいことも明確に決まってないんですけど、現

地でしか感じられない真のインドネシアみたいなのを感じられたのがすごく刺激的で、ぐっときた体験だったなと心から思っています。(中略)インドネシア語は、自分の聞きたいことを聞くとかその場の雰囲気作りとか、まだまだ足りない部分があって、まだまだもっと学びたいインドネシア語があるっていうのを改めて感じました。

筆者の研究会や講義科目を履修し、インドネシアやイスラームへの知識や理解を持つ上級生たちの中にも、11日間の滞在を通して、自分の理解は全く不十分だったということを知り、すぐには分からない、すぐには答えが出ないことを知って(床呂, 2015, p.23)、次の学びにつなげたい、という感覚を持った学生がいた。また今後インドネシアへの留学が決まっている学生はその心がまえを、またインドネシアを専門に研究していこうと考える学生は、その際に大事にしたいことを話してくれた。

私の知っていたインドネシアは本当に一部分に過ぎなかったんだなって。(中略)イスラームのことであったり、インドネシア語を学ばないで、何をインドネシアを学んでいると語れるんだろうと。(中略)そういう意味で、自分は何も知らなかったということに気づけて、また学びたいっていう気持ちが起こってきたのもすごく嬉しかった。

僕がインドネシアに来る意味はなんなんだろうと考えていて、例えば飯が安いとか、人がいいとか、そういう良いところを並べていると、まだ消費してるだけな気持ちで。(中略)自分の生活と対比して、インドネシアをただ消費する対象として好きじゃないかなっていう感覚があって。実際に8月から留学することが決まっているので、そこで1年間過ごす中で、もっと色々な視点でインドネシアを見るのを、心がけたいです。

普段、勉強してる国際関係とか国際政治って、国家の動きや戦略を重視しがちで、そこに住んでる人々の思いとか、一人一人の顔を忘れてしまうこともあると思うんです。今回実際にカンブンやラエラエ島に足を運んで、近い距離で人に話を聞く経験をして、こういうことの延長線上に、国際政治とか国際関係があるんだということを常に忘れずに、研究をしたり、将来に生かしていくのは大切だと。国際関係も、ローカルであり、グローバルかつグローバルな研究テー

マだと思うので、今後もし1年間、留学できることになれば、いろんな人との対話も大切にしていきたいと思います。

今回の特プロ参加者18人が、その後、どのように学びを継続しているかは、先の表の右3列に示した。2023年3月で卒業した4年生と留学組を除き、2023年春学期には全ての学生がマイ語または筆者の研究会を履修した。また、3年生以下の参加者13人のうち7人が、2023年夏または2024年夏から1年間のインドネシア留学を経験することになる。特プロを終えて1年後や2年後に学生たちがどういう学びを継続しているのか、特プロで学んだことはどう生かされているのか、などの検証は今後の課題としたいが、少なくとも、特プロを終えた学生たちはその経験を生かして学びを継続させていることは明らかである。

5. おわりに

本稿は、筆者がSFCで担当する特プロを、SFCの継続的な学びの中で地域研究の素養を学べる科目と位置づけ、2023年春休みに実践した特プロで収集したデータをもとに、その成果を検証した。

1章で地域研究という方法論をめぐる批判を参照しながら、地域研究が目指すものを整理し、2章では本特プロの概観を示した。各班の研究成果の要点は3章で示した通りだが、学生たちは期間中にポスターと動画を完成させてハサヌディン大学での最終日の発表に臨んだ。発表も動画も班ごとに工夫が凝らされており、同大学の先生や学生たちにも興味を持って聞いてもらえた。

また4章では期間中毎晩のミーティングでの学生たちの発言を分析した。それによれば、本特プロを通じて学生たちは、フィールドワークやインタビューといった地域研究に不可欠の活動を実践する機会を得た。フィールドでは、想定していたことと異なる現実があること、インタビューで他者から話を聞きだすことは簡単でないことを知り、他者の生活空間に入り込み、インタビューでデータを収集するという行為自体に違和感を覚えたり、会話の背景にある文脈を読み解こうと工夫したりする学生の姿が見られた。こうした地域研究の実践の場において、現地の言葉を理解し使いこなせることは大きなメリットがある。けれども一方で、人との距離を縮めるためには、言語を用いるだけでなく、モノを介したコミュニケーションやその場の雰囲気づくりなども効果的だということを学生たちは発見し実践していった。また学生たちは、プロジェクトを進める中で、これまで他者をひとまとめに理解してきたことに気づき、インドネシアの中にある多様性に目を向けるようになって

た。自らが無意識のうちに持ち続けてきた特定の価値観や思い込みが相対化されていく感覚を多くの学生が味わい、インドネシア社会を見ることで、日本の状況や自分を取り巻く環境についても再認識し、異なる視点を持つようになった学生もいた。筆者の研究会や講義科目、マイ語を履修し、インドネシアやイスラームに関心を持ち、より理解を深めたいと考える学生にとって、本特プロは学習効果が高いことも分かった。短期間ではあるが、学生たちの継続した学びの中でこの学習が持つ意義は大きく、各々がその後の研究に繋がるヒントを得て、現地への長期留学を決めた学生たちもいた。

本稿で論じた特プロは、担当教員としての筆者が、企画から現地との交渉や調整、諸々の手配などをほぼ一人で行っている。準備にかかる労力や学生たちを海外に連れていき安全に活動させるという責任の重さを考慮すれば、教室で教える一般の科目に比べて当然、「割に合わない」科目である。しかし、こうした学習効果や学生たちの気づきや変化の一端を垣間見られることは、担当教員として何よりの喜びであり、またやりがいも大きい。西洋中心主義や自文化中心主義など自分たちが含まれるグローバルな力関係を問い直し、異なる人々とより良い世界を築いていくための足がかりとなるような学びを学生たちに与えることができたのではないかと筆者は考えている。参加した学生たちが、将来、それぞれの場所で、異なる人々と協働しながら、よりよい世界の構築に貢献してくれることを切に願いつつ、うまくいかないところは都度修正し、効率化も進めながら、今後もできる範囲で本特プロを続けていきたい。

注

- 1) 偏見や差別を乗り越える大学教育の一環として本特プロの成果を検証した(野中, 2023)が、これまでに書いた唯一の論考である。
- 2) SFC ウェブサイト「総合政策学部理念・概要」(<https://www.sfc.keio.ac.jp/academics/pmei/outline.html>)。
- 3) 学生のプロフィールに関する記述は、学年や履修済の科目などを含め全て 2023 年 3 月時点のものである。
- 4) 特プロを題材にその成果を論文にまとめるため、そのデータとして毎晩のミーティングでの参加者の発言を使いたいということは、事前に参加者たちに伝え了承を得た。ここでは、各発言が誰のものか特定できないよう、発言者の名前は伏せ、属性も記載しない。

参考文献

- 荒井正剛、小林春夫編著(2020)『イスラーム／ムスリムをどう教えるか—ステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解』明石書店。
- 姜尚中(2004)『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判』岩波書店。
- ギアーツ, C., 吉田禎吾他訳(1987)『文化の解釈学 I』岩波現代選書。
- 岸政彦、石岡丈昇、丸山里美(2016)『質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学』有斐閣ストゥディア。p.37-94。

- 倉沢愛子(2013)「消費行為としての教育一次世代に託す希望」倉沢愛子編著『消費するインドネシア』慶應義塾大学出版会。p. 211-40。
- クリフォード, J. (1996)「序論—部分的真実」クリフォード J, マーカス G. 編, 春日直樹他訳『文化を書く』紀伊國屋書店。p.1-50。
- 児玉谷史朗、佐藤章、嶋田晴行編著(2021)『地域研究へのアプローチ—グローバル・サウスから読み解く世界情勢』ミネルヴァ書房。
- サイード E.W. (1993)『オリエンタリズム下』平凡社。
- 酒井直樹(2017)『ひきこもりの国民主義』岩波書店。
- 佐藤知久(2015)「フィールド哲学とは何か—思考するために適した場所で考えること」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手触り—フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版。p.27-40。
- 柴宜弘(2016)「地域研究としての日本研究」『中欧研究』2, p.1-12。
- 武内進一(2013)「地域研究とディシプリン」『学術の動向』18(7), p.52-7。
- 坪内良博編著(1999)『＜総合的地域研究＞を求めて—東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会。p.1-18。
- 床呂郁哉(2015)「研究者はなぜフィールドワークへ行くのか?」床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか—フィールドワークへの誘い』東京外国語大学出版会。p.10-31。
- 野中葉(2023)「インドネシアで自己変容を目指す—異文化理解を超える海外フィールド学習の可能性」『上智アジア学』41, p.127-48。
- 浜本満(1996)「差異のとらえかた—相対主義と普遍主義」青木保他編『岩波講座文化人類学第 12 卷—思想化される周縁世界』岩波書店。p.69-96。
- 箕曲在弘、二文字屋脩、小西公大(2021)『人類学者たちのフィールド教育—自己変容に向けた学びのデザイン』ナカニシヤ出版。
- 宮本常一、安溪遊地(2008)『調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版。
- 山本博之(2012)「新しい地域研究をめざして」『地域研究』12(2), p.6-15。

[受付日 2024. 9. 16]

